

# 平成4年度国際共同研究報告

—— 東北アジア文明の源流をもとめて ——

秋 山 進 午

## 1. 出発まで

平成3年度の共同研究は、平成4年3月に孫守道先生ら3人をお迎えし、当初の予定の箇所の参観や学術交流を行い、無事終了した。

平成4年度は、いよいよ共同研究の最後の年にあたる。今回は考古測量調査を1箇所行ったあと、これまでの2年間の調査で不十分であったところを補うことに重点を置き、遼寧省側と事前折衝を行った。それによって、考古測量調査は遼寧省東部の鳳城県で発掘調査の行われた東山大石蓋土坑墓群の測量調査を行うこととなり、早速中国国家文物局あて共同研究の申請書を提出した。昨年は許可が出発直前までかかり、ずいぶんはらはらしたが、二回目の今回はスムーズに事が運び、申請から2箇月以内で遼寧省側に許可証が届いた。我々の国際共同研究の意義が中国考古文物当局に認められたものと喜ぶたい。

そのほか、この春、共同研究のため来日された際、辛占山先生によって紹介された將軍墓をふくめ、高句麗の旧都の桓仁へ、昭和19年の三上次男先生以来約半世紀ぶりに、外国人考古学者として初めて、踏査に向かうことが事前に明らかとなった。また、遼西では阜新市査海遺跡に新築された遺跡博物館と平頂山遺跡、北票県の馮素弗墓、朝陽市の牛河梁遺跡再訪、義県万佛洞石窟、錦州博物館参観、そして最後に綏中姜女石の秦漢宮殿遺跡と、かねて参観と調査を希望していた所をほぼ網羅した日程があらかじめ示され、共同研究最後の年に相応しく、期待に胸一杯で準備にかかった。

今回のメンバーは昨年度と同じく、次の通りである。

団長 秋山進午 大手前女子大学文学部教授

団員 岡村秀典 九州大学文学部助教授

団員 宮本一夫 愛媛大学法文学部助教授

団員 大貫静夫 東京大学文学部助手

団員 廣川 守 財団法人泉屋博古館学芸員

## 2. 平成4年度の日本側研究

出発は前2回と同じく、大連便の便利な福岡空港とし、前日の24日夜、福岡に全員集合とした。これまで2回とも台風の直撃を受け、右往左往させられたので今回も心配したが、3度目の何とやらで台風19号は幸い九州の西側に逸れ、初めて予定通り全員顔を揃えることができ、荷物の振り分けや調査の打ち合せをゆっくり行えた。

9月25日(金) 九州は雨、大連は快晴、風強し ー大連へー

9時福岡空港着。全日空 NH. 1105便に乗り込み11時19分離陸、台風の名残りか途中は雲が多かったが大連は快晴となり、上空からの写真が撮れた。12時30分(中国時間、以下同じ)大連周水子空港着陸、郭・孫・辛三先生が揃って出迎えてくださる。ほかに旅順博物館の劉広堂副館長、定年退職された許明綱先生の後任として大連市文物調査研究員となられた、張本義前金州博物館長らも出迎えにきて下さった。何時もながら丁寧な中国側の歓迎に感謝する。我々一行が利用するマイクロバスの運転は今年も斉軍君。3年目の今年もダンディな着こなしで迎えてくれた。皆んなお馴染みの方々ばかりに迎えて頂き外国にきた気分がしない程で、この3年間の交流の絆の強さを実感させられた。

14時30分、大連市付家庄の華能賓館に入る。後で孫守道先生から聞いて驚いたのは、ホテルのある付家庄はもとの濱町だとのこと。有名な大連濱町貝塚の所在地点であった。もっとも現在では貝塚は消滅しているらしい。

ホテルは海水浴の出来る海岸に近く、海には小さい島が2～3個浮かび、緑も多くなかなか美しい所である。窓の下には床面積が200m<sup>2</sup>以上ありそうな、瀟洒な2階建ての住宅が雛壇状に並んでいる。聞けば、大連の経済開発特別区に進出する日系企業幹部用に準備されたものとのことだが、ほとんどが空家のままである。

15時30分から17時30分まで郭・孫・辛三先生と日程打ち合せ。この席で初めて、かねて熱望していた旅順博物館へ、明日行けることになったことを知らされた。全員大喜び。軍港旅順は今も外国人の立ち入りが禁止されており、我々が当初計画した四平山地区も含め、許可を得るのが極めて困難であったが、この度大連市当局の特別の計らいで、参観が許可されたものである。

18時10分ホテル発、麗景大酒店で大連市共産党副書記林慶民氏、大連市文化局長李勤明氏等を囲んで宴会。このお二人の後押しと大連市文物調査研究員の張本義先生のご努力で、今回、旅順博物館参観が許可になったとのことで、心から感謝の宴となった。明日の会議のため、今夜中に瀋陽へ着く必要のある郭先生と別れ、20時30分ホテル帰着。

後で郭先生から聞くと、車の故障のため高速道路の途中で立往生し、瀋陽着は翌早朝

となり、一睡もしないで会議に出席したとのこと。

9月26日(土) 快晴 一旅順博物館一

8時06分、ホテル発。9時17分旅順博物館着。劉広堂・蘇小幸両副館長に迎えられ、応接室で博物館の概要を伺った後、いよいよ参観に向かう。私は4年前に遼寧省人民対外友好協会の招待を受け、三宅俊成先生とご一緒に、日本人研究者として戦後初めて参観(朝日新聞1988年7月2日朝刊に寄稿)して以来2回目であるが、他の団員諸氏は初めての参観である。青銅器や漆器の陳列室は、どうしても急ぎ足になり、新疆考古文物すなわち“大谷探検隊”将来の中央アジア出土品の展観室へ向かってしまう。小さい一室は織物・木工品・金工品・騎馬人物俑など、大きい一室にはミイラ6体、それと墓誌類が展示されている。

階下には大連市域出土の発掘資料の展示がある。長海県広鹿島呉家村遺跡の玉飾、旅順郭家村遺跡の装身具類、新金県双塔紅旗村(『考古』1984-8)と旅順尹家村の鑄型、楼上村の土器など、短い時間で皆メモをとるのにも時間がない。いずれゆっくり参観に訪れたいものである。早く、早くと急かされ、止むなく見学終了。別館の館長室で大連市域発掘資料の一部を特別に参観させて下さる。

11時30分、旅順博物館に心を残しながら出発、12時30分、鮮英楼飯店着。大連市李副局長と宴会、待望の旅順博物館を見学できた喜びから、昼間にもかかわらず歌や踊りもでておいにはしゃいだ。14時30分終了後、私は宿舎で早くも休養、他の団員諸氏は大連市大嘴子遺跡見学に行く。3年前の環渤海考古学会の時にも見学したこの遺跡からは、双砬子3期層から土器に入った炭化米が出土したことで、注目が集まっている貝塚遺跡である。もし事実通りなら、わが国への稲の伝来にも大きな問題を投げ掛けることとなる。夜、今度は渤海酒店にて李文化局長を囲んでの宴会。2日目にして早くも体調黄信号。

9月27日(日) 晴後曇 一岫岩県博物館一

7時35分、ホテル発。瀋陽—大連高速道路を北上、普蘭店から黄海沿いに東へ、11時、庄河着。ここから昨年とは異なり、左折して内陸部の岫岩満族自治県へ向かう。12時45分岫岩着。人口約50万のうち約30%が満州族とのこと。岫岩文化局の皆さんと昼食。心配は事実となってまたもや宴会。そののち岫岩県博物館にて、最近略報告が発表された岫岩北溝遺跡(『考古』1992-5)の出土品を見学する。多数の土器・石器、それに玉製の装身具類が展示されていて、なかなかの収穫であった。

15時20分、文化局の皆さんに見送られ岫岩発、大営子を経て18時、もう薄暗くなった鳳城県文化局到着。さらに文化局の車の先導で、真っ暗になったなか、18時40分、鳳城滞在中の宿舎となる鳳凰山荘着。早速、地元の皆さんの歓迎宴会。

9月28日(月) 曇・大雨・雨 一東山・西山遺跡、鳳城県文化局一

8時、宿舎発。9時過ぎ、今回考古測量を行う鳳城県草河郷管家村西赫家堡子の東山遺跡着。この遺跡は先に南山頭遺跡（『遼海文物学刊』1987-1）として略報告されたものである。

丁度我々が訪れたときは、既に許玉林先生の下で第二次の発掘調査が行われている最中であった。一応の見学を終え、この東山遺跡と、平地を挟んで向かい合った西山遺跡の見学に向かった。こちらも報告は未だだが、すでに尾根上に並んだ4基の石蓋土坑墓が、すべて掘り上げられていた。

見学中に、突然空が暗くなると猛烈な雨が降りだし、皆あわてて山を下り、途中の木立中に避難したが、雨脚が強く皆びしょ濡れとなった。30分ほどたってマイクロバスが途中まで迎えにきてくれ、やっと避難することが出来た。11時30分、宿舎へ引き上げ昼食。私は連日の宴会がこたえ、早、節食となる。

午後は14時宿舎発、鳳城県文化局で保管中の東山出土遺物ほか、この地域から出土した資料を調査した。東山遺跡出土の土器は、全部で9点が復元されていた。器形は大型の粗質双耳長頸壺と小型の粗質壺、および、いわゆる美松里型壺である。これらは既にこの遺跡の略報告（『遼海文物学刊』1990-2）に発表されているが、ごく一部だけから全体を復元したものもあり、報告書だけから論を進めることは、問題が多いことを思い知らされた。石斧類も多数あったが、柔らかい石灰岩を素材とした、明器もあることがわかった。なかには5号墓出土の、側面に明瞭な擦り切り痕を残すものがあった。ほかには石鑿、それに8号墓出土の石包丁もみられた。

鳳城の周辺には様々な遺跡がある。東山の考古測量調査が終わった後、いくつかの遺跡を踏査したが、それらの遺跡出土品をあらかじめ、ここで見る事が出来た。その一つは劉家堡遺跡で、戦国時代の灰陶土器片、および前漢の丸瓦当と平瓦が出土している。また古城里遺跡は鳳凰山高句麗古城の中にあり、そこから紅色の高句麗瓦が採集されている。高句麗の灰陶壺が採集されている胡家堡へは、この度は行くことが出来なかった。16時45分、見学を終え宿舎へ帰る。

9月29日(火)～10月2日(金) 一東山石蓋土坑墓考古測量調査一

昨夜も雨が降ったので心配していた天気は持ちなおし、いよいよ東山の考古測量調査に入った。その後、天気は雨こそ降らなかったが、だんだんと悪くなり、最後の日は今にも降りだしそうになり、風が吹き荒れてとても寒い思いをしたが、予定通りに測量を終了することが出来た。

この鳳城県は昨年共同調査の際、鴨緑江岸の丹東から、本溪を経て瀋陽に向かったときに通過したところで、丹東からは車で1時間程の距離である。その時、同行の孫先生から、この町の周辺に漢と高句麗の遺跡があることを教わったが、これまで、まとまった報告はされていない。今回、共同研究を行った東山石蓋土坑墓群のみが、すでに報

告されている遺跡である。

遺跡は鳳城県の東北約15km、鳳城の東を北から南へ流れる、草河の左岸にある。周囲を高低の山で囲まれた小さい盆地の中に、東北に聳える老黒山から派生した低い丘陵が幾本も延び、その丘陵の一つの先端部分と、丘の下の平地部分とにまたがって、多数の石蓋土坑墓が群集している。

共同研究に入ったときは、すでに許玉林先生のもとで、第二次の発掘調査が行われている最中であった。したがって、ほとんどの墓は掘り上げられており、発掘が終わっている状態で、なお最後に残った丘陵上の一部分の発掘が行われているところであった。昨日鳳城県文化局で見学した土器・石器は、既に報告された第一次調査の出土品である。

我々の考古学常識からいえば、発掘に入る前に地形測量を行う順序であるから、発掘中の状況を横目でみながら地形測量をするのはなんとも妙で、他人の調査の尻拭いのような具合である。日中の考古発掘の意識の違いを、改めて実感させられたことであった。

とはいうものの、我々にとって石蓋土坑墓の発掘の状況が見られるのは、誠に興味深い所である。既に発掘が終わっていたところとはともかくとして、最後に残されていた丘陵上の発掘区では、孫先生の指導の下に、広範囲にわたる発掘が行われた。これは、孫先生が来日されたとき、日本の発掘現場を見て、早速、遺跡の全面発掘調査を中国において取り入れようとされたものである。

丘陵上の発掘区は約10×12mで、全面を開いてみると、6号墓と18号墓が蓋石をもっているのに対し、その周辺に蓋石を持たない墓が付属している模様である。そして、これらの墓の周囲に、構造とは無関係な、墓域を区画する石列が取り囲んでいた。

こうした墓域全体の構成は、石と土という違いはあれ、昨年実際に見聞することの出来た、遼東半島に多数見られる積石塚と構成が良く似ていることに気が付く。こうした石蓋土坑墓群は、積石塚の影響の下に、この地域で作られた埋葬形式、と考えることが出来よう。

発掘も進み、10月1日午後には、これまで未発掘であった、18号墓の石蓋を開くことになった。蓋石は長さ1.9m、幅1.2m、厚さは30cmほどある。重さは1t近くあろうか。この大石を、吊り上げるのではなく、横に穴を掘り、そのなかに落とし込むのである。鉄槌子1丁と人力だけで行われたこうした発掘状況は、中国の考古学事情の一端をあらわすものであろう。

当初の予想と異なり、コの字形に大石の周囲にあった石列は、大石の下の支え石ではなく、石蓋は直接土坑の上に乗せられており、土坑の一部に別の石積みがある状況であった。土坑の内部は翌日までに完掘されたが、残念ながら期待は裏切られ、無遺物であった。

発掘区の拡張も行われ、北の20号墓（この番号は重複しており、今後変更があるかも

しれぬ)と北西の19号墓が続いて発掘された。測量調査も終了に近づいた2日午後、20号墓から土器が発見された。斜め横倒しになった土器は、粗質双耳長頸壺で、ほぼ完形を留めており、しかも内部には土が1杯詰まっていたところを見ると、土坑の内部は埋葬後も相等長い間、空間のまま、徐々に内部へ土砂が入っていったこととなる。

さらに隣の19号墓の整理を行っている最中、東側の石積みの内部から薄緑色の玉製の小型垂飾が発見された。長さ2.6cm、厚さ0.2cmの長方形で、一端が狭まったところに両面穿孔の小穴が開けてある。石蓋土坑墓から玉製品が出土したのは初めてであろう。とはいえ、出土した場所が乱石積みの間である。発見されたのは我々の測量調査の最終日であった。発掘はそれ以後も進められるはずである。玉飾の出土状況の解明が進むことを期待しつつ、我々は現地を離れた。

10月3日(土) 曇 一鳳凰山高句麗山城、劉家堡遺跡—

7時40分宿舎発、先ず鳳凰山高句麗古城参観に向かう。8時、古城子着。先日、鳳城県文化局で見た高句麗古瓦はここから発見された。周囲は、丁度、火山の爆裂火口のように、長さ1kmほどの楕円形の揺り鉢状になった地形で、その周囲を、切り立った鳳凰山の稜線が取り巻いている。高句麗の城壁はその稜線に沿って築かれている、ということであるが、下からでは何も見えない。

鳳凰山は今、秋の真っ盛り、見事な紅葉に彩られている。城内は西の城門から東へ段々に高くなり、東端が峠となって、そこに東の城門がある。今は道の両側に礫石が堆積している。ここから左右の稜線に沿って石垣が築かれている。右手の稜線を登るが、私と辛さんはとても皆さんについて行けず、諦めて稜線上から見上げると、皆はもう遙かに高い、尾根上の石垣の上に立っている。石垣は岩山の岩盤の上に、高さ6mはあろうか。煉瓦を積み上げたように石が整然と積まれている。見たところ、城壁というよりは堡塁に近く、延々と連続しているようではない。予定の時間までに往復する自信がなく、行くことを諦めたが、皆に聞くと断続的ながら、さらに石垣が延びている所まで進んだ、ということであった。

ふもとの農家に、三上次男先生が「桓仁考古行記」(『民族学研究』新3-1 1946年、のち「東満風土雑記」と改題し『高句麗と渤海』1990年に所収—以下「行記」と略称)に書いておられる、高床式の倉庫があった。珍しくて、皆で写真を撮る。

高句麗山城から少し西に、劉家堡の遺跡がある。この遺跡の出土遺物も、先日、鳳城県文化局で見た中にあり、戦国時代後期から前漢時代初期の土器が発見されている。遺跡の現状は、ただ畑が広がるばかりで、特別な遺構は何も残されていない。詳しいことはこれからの調査に待ちたい。

11時45分宿舎へ帰り、昼食後12時55分発、寛甸経由桓仁へ向かう。峠を何度も越え、今回の最長の移動距離となる。途中、車の事故などもあり、桓仁到着は22時。走行距離

は260km。それから料理人を呼び戻し、夕食は23時30分からとなる。宿舎は桓仁満族自治県影劇院招待所、始め聞かされていたよりは結構な宿舎である。明日からの高句麗遺跡に、思いを馳せながら就寝する。

10月4日(日) 快晴 一将軍墓, 上・下古城子一

朝、廊下の窓からいきなり五女山城が見えた。朝日の影となっているが、なるほど、その特徴ある山容は、一見してそれと判る。町から距離があるせいか、高さはあまり感じない。この五女山城はじめ、桓仁の遺跡調査に訪れた日本人考古学者は、1944年(昭和19)6月の三上次男・三宅俊成先生一行ら以来、絶えてなく、実に約半世紀ぶりに我々が訪れたことになる(三上次男「行記」参照)。

朝食の時、去年本溪で世話になった、本溪博物館の魏館長と文化局長が来ている。聞けば桓仁は本溪市の管轄になるとのこと。桓仁は面積約3500平方km、人口31万程でその43%が満族である。農業県で米・大豆・玉蜀黍のほか、遼寧省でもっとも海拔が高い地形を生かし、養殖人参生産量の5分の1を産するとのこと。なるほどあちこちの山の頂上に近い北側急斜面に、黒いビニールハウスが目についた。

8時50分宿舎発、通溝への道を東進し、7kmほどで右へ折れ、地道を下る。桓仁から通溝へは、車で2時間程とのこと。下り切って右へ、山々に囲まれた小さい平野にでる。荒溝甸子の平野である。今、一面の黄金の稔りの時である。その向こうにU字形に回る佟佳江の青い流れが区切る、低くなだらかな緑の丘の真ん中に、三上先生が一伏しの乳房、と記された将軍墓が望まれる。もっとも、見る位置の所為か、私には乳房ではなく、小さい乳首に見えた。

平野をさらに北へ回り、秧歌汀の渡舟場に着く。三上先生もここから佟佳江を渡られた。澄んだ流れのままに、滔々と流れる佟佳江の向こう岸に聳える断崖や、その先の米倉溝の丘の佇まいは、約半世紀前に、三上先生が情趣溢れる流麗な筆致で報告された時と、ほとんど変わらぬ情景ではなかろうか。渡し船は約200m程の川幅を、5分ほどでゆったりと漕ぎ渡してくれる。今、渡し賃は5角。対岸の“河神の祠”はいまは無い。

坂を登って丘の上に出ると、始めて将軍墓がその墳丘を見せる。三上先生の「行記」では、墓の上に榆の大樹が二株茂っていた、とあるが今は無い。外国人の訪れが珍しがられ、丘上は人で一杯となり、警官が出動する騒ぎである。

この墓の発掘は、今年春、来日された辛先生によって紹介されたごとく、1991年から始められた。現場主任の武家昌さんの説明によると、墳丘は直径30m、高さ8mの円墳で、封土は階段状となる。甬道の左右には耳室があり、主室は四壁平行持ち送りの天井をもつ石室である。内部に花崗岩製の棺台二基が設けられている。興味を引くのは内部壁面全面に壁面が描かれていることで、それも蓮華文と“王”字をちりばめた錦の織物を吊り下げたようである。その外、天井部には奇妙な文様もみられた。また、主室壁面

上部に各々6本の銅釘が打ち込まれており、何かを吊り下げていたことが判る。

桓仁での初めての大型高句麗古墳発掘であると同時に、初めての壁画古墳でもある。

三上先生が訪れられた時には盗掘孔が開いていた、とあるが、それにしては壁面の色彩は良く残っている。盗掘のため、めぼしい遺物はなかったが、黄釉の大型の竈と四耳壺などの典型的な高句麗遺物があった。

陪塚は全部で10基ほどあるとのことで、そのうち主墳の東約90mに、北から3・13・2号墓と3基が南北にならんだうちの、2号墓と13号墓が発掘されていた。三上先生の報告では、この位置の陪塚は2基、とあり、どれに当たるか明瞭ではないが、おそらく封土をもった2・13号墓を指すのではなかろうか。

丘の南が米倉溝で、ここからは地名のように良質の米が採れるそうであるが、みな中央へ買い上げられ、地元の人々の口に入らぬとのことである。西北に佟佳江を隔てて望まれる董船営の丘には、高句麗初期の階段式積石塚が多数築かれているとのことで、この地も古くからの高句麗根拠地の一つであったようである。

再び佟佳江の渡し舟に乗り、秧歌汀から今度は佟佳江沿いに桓仁へ。河越しに望む五女山城は実に印象的である。13時宿舎着。

午後は先ず下古城子に向かう。桓仁から西へ佟佳江を渡り、西北へ4kmほど瀋陽への街道を進むと集落に着く。三上先生らが高句麗古城探査のため訪れられた新古城子で、ここには古城はないが、高句麗初期の方段積石塚群がある。もとは200基ほどが群集していたらしいが、現在は30基ほどが、遼寧省の省級文物保護単位として保存されている。発掘されたものはなく、内部の詳細は不明であるが、外観の残りの良いものが10基ほどある。そのうち基底部の四隅が、突出するような状況を明瞭に残したものも、幾つか見られた。上部は河原石を積み上げて築かれている。出土の土器は漢式に近いもので、釉の無いもの、とのことである。

ついで下古城子へ向かう。三上先生の旧古城子である。街道から少し離れ、遠目にも小高く見える。佟佳江に面した東側は、河の氾濫で削られている。三上先生は新しい遼金時代の城跡と報告されているが、最近調査した吉林大学の魏存成氏は、漢代以降の土器片を採集しているとのことである。門跡は古城の南北に、各々一つずつあるようである。もっとも、今古城内は隙間無く民家が建ち並び、調査は容易ではなかろう。城跡に建てられた標識には、この古城遺跡を高句麗初期の平原城跡としている。

先の上古城子からも、この下古城子からも、五女山城が望めるのはいうまでもない。実際、三上先生もお書きになっているとおり、桓仁ではどこからでも五女山城を仰ぐことが出来る。いよいよ明日は、その五女山城に三上先生が登られて以来、約半世紀ぶりに日本人考古学者として登ることとなるのだ。

10月5日(月) 快晴 一五女山城一



今日も天候に恵まれた。朝から雲一つ無い快晴である。大連以来節制に努めつつ、つぎつぎと宴会が続いて一向に良くならなかった胃腸も、宮本氏の特効薬のお陰で今朝はすっかり快調に戻り、意気揚々と7時40分、宿舎を出発した。

三上先生らは五女山城の麓から、徒歩で頂上へ向かわれたが、1984年にテレビ塔が山頂に建てられることとなり、そのため工事用の道路が頂上の岩壁直下まで開通した。九十九折の道路が、松や針葉樹林の間を縫ってどんどん高くなる。桓仁市内の宿舎から40分、距離13kmで頂上直下の駐車場へ到着した。ここから頂上までレールが敷かれ、台車に結んだワイヤーロープを、ウインチで巻き上げるようになっている。中国人同行者はほとんどがこれに乗る。つまり、今は頂上まですべて乗り物に乗ったまま行ける。三上先生の調査の時とは隔世の感がある。我々は危険な台車に乗るのを辞退し、ここから玄武岩の絶壁の割れ目を、歩いて登ること約25分で頂上へ着いた。この部分だけ三上先生の足跡を辿ったことになる。かつてあった山の神の石祠は、ロープウェイ建設のため撤去され、今は無い。石罫は三上先生の図よりも西へ曲がり、そこに守衛のための住居があったのではないかといわれる。

頂上は雑木林となり、丁度迎えた紅葉に一面に彩られ、実に見事である。西の岩壁沿いに平坦な道を辿る。すぐTV局の建物と送信塔がある。1986年にこの局舎建設に先立つ発掘調査を行い、遼金元時代の遺物多数と、少数の高句麗遺物が出土したらしい。その先の道観は廃墟となり、土台のみ残る。池は天池と名付けられ、周囲が石垣で囲まれている。ここも1986年の調査のとき、池ざらえされた。この池は西側の断崖に接しており、側に展望台が設けられている。三上先生もこの山頂からの絶景に筆を割いておられるが、先生が御覧になった時と大きく異なるのは、すぐ南を流れる佟佳江がせき止められて、大きなダム湖が出来ていることであろう。とりわけ、最も高い頂上南端からの景色は素晴らしく、遥か彼方まで連なる山並みの間に、湖の水と朝霞とが混じり合い、湖とも陸とも知れず広がる様は、さながら仙界に浮かぶ思いであった。

ついで、頂上の東南部の岩盤の割れ目を、下るというより半ば滑り下り、三上先生が発見された城壁を見た。城壁石垣はこの南端部分が一番高く、絶壁直下から始まり、約100m下って、絶壁を鉢巻状に取り巻く小道に至り、ここから北へ小道に沿って延々と続く。約300mほど進むと道が二つにわかれ、石垣も直角におれて門となる。この門跡は高さ6mほど石垣が聳え、整然と積み上げられた石垣は元の姿を良く留め、実に見事と言うほかはない。既に崩落して表面が崩れた箇所が多い中で、この門跡の石垣のみは、隙間無く整然と築造当時の石積みを留め、苔蒸したたたずまいに星霜を偲ばせるものがある。三上先生が、輯安の山城子山城の北壁を彷彿せしめる、と表現されたのもこの門跡に違いない。

三上先生がこの石垣を実見されたのは、頂上の調査で城跡が発見されず、一旦麓まで

下られたところへ急報が入り、再び急坂を登って戻ってこられてからのことである。しかも、他の遺跡と比較し、高句麗の遺物の散布が無いなどの理由をあげて、決して結論を急がなかった冷静な態度には全く頭が下がるものがある。

11時50分、再び車に乗り、12時40分、渾江ダムの船着き場に設けられた渾江漁場食堂で、ダムで捕れる魚の料理の昼食。広大な地域がダムのため水没し、代わりに出現した湖へと大きな変化であろう。三上先生が桓仁再訪の際に、調査を予定されていた高力墓子村も、簡単な報告（『考古』1960-1）が発表されただけで、湖の底になってしまった。

食後13時45分、湖上遊覧船に乗る。遊覧などもったいないと思っていたが、船は連絡船の役も兼ね、おかげで五女山城の東面や、高力墓子村の上方に残された大型墓を遠望することが出来た。16時船を下りて宿舎へ向かい、短いが有益であった桓仁での参観を終わった。

桓仁では終始、三上先生の「行記」を片手に、見学を行った。我々よりあらゆる点で不便な状況の中で、調査に当たっているにもかかわらず、観察の精緻で正確なこと、そして、いかなる時でも、みずみずしい感性に溢れた目で、しかも冷静に調査を行われた態度に、改めて驚嘆を禁じ得なかった。

遼寧省東部の考古遺跡について、昨年の共同研究では、丹東市後窪遺跡と本溪市・撫順市の出土遺物を見た。今年は鳳城県で発掘参加をはじめ遺跡見学をし、短期間であるが桓仁県で主要な遺跡見学を行った。共に、日本人考古学研究者として新中国になってから初めてのことである。今回の国際共同研究の大きな成果の一つである。

この遼寧省東部地域の考古遺跡については、中国考古学研究者はもとより、高句麗を始めとする東北アジアの古代民族と、その文化を研究する幅広い研究者が、大きな関心をはらってきたのにもかかわらず、これまで十分な情報が得られなかった。

しかし、現地へ行って分かったことは、この地域の本格的な考古研究は、やっと始まったばかりである、ということである。遼寧省の考古学研究は、これまで緊急を要する遼寧省西部地域に重点がおかれてきた。將軍墓の発掘などを契機として、遼寧省東部の考古調査はこれから盛んになってくるに違いない。今年、中国と韓国との国交が回復した。この地域の考古調査の重要性も一層増すであろう。中国側の今後の調査の進展に期待するだけでなく、我々としても一層の共同研究の方策を考える必要があると思う。

10月6日(火) 霧後晴又は曇 一永陵陵園一

桓仁を立つ朝は一面の霧で、五女山城は姿を現わさないままであった。7時42分宿舎発、三上先生が撫順から桓仁へ来られた道を逆に辿る。8時50分峠を越え蘇子河流域へ入る。清朝発祥の地である。峠から下る街道の両側の民家には、高床式の倉庫と並んで校倉造りの倉庫が設けられている。三上先生の「行記」にも写真がある。しかし今は穀物は高床式倉庫に入れ、校倉の方は物置きに使っている。部落の人に聞くと、この校倉

はこの地域にしか残っていないとのことである。

また、三上先生がこの地域の特徴として、写真を掲載されている蜜蜂の巣は、最近では山東省の養蜂業者が盛んに来るため、地元では止めてしまったとのことであった。

さらに下って都督を過ぎ、榆樹郷に入った哈山村で土器造りの集落があった。車を止めて夏中奎さんの作業場に入り込み、作業を見学する。大甕を専門に造っている工房である。作業場には足蹴り轆轤が50台ほどずらりと並べられ、先ず底を造って回る。ついで粘土紐の輪積みで底部を造り、叩きと撫でて成形する。3人の工人が50台の轆轤を順次回る流れ作業で、手慣れたものである。短時間の見学のため、成形作業を最後まで見ることは出来なかったが、大きい土器を3段に分けて成形している。外面は斜めに木目を使った叩き板の模様、内面は陶器製当て具の青海波模様が付けられていた。

丁度焼き上がったところの窯を、私達のために開けていただいた。円形の煉瓦造りの窯の中にぎっしり大甕が積まれていた。もっとも興味を惹いたのは窯の中で甕を積み重ねる際に、素焼きの楔を、合わせ目一面に差し込んでいることであった。

永陵に入る手前の蘇子河の川岸で、漢代小土城を遠望する。三上先生らが発見された大きい土城は、今は破壊されたとのこと。

10時40分永陵陵園着。昨年修復が完了したばかりで、どの建物も色鮮やかである。12時見学を終え、永陵の街の食堂で満族料理を頂く。13時20分、蘇子河越しに煙突山を眺めつつ永陵を出発、撫順をへて瀋陽へ向かい、16時30分瀋陽の宿舎東栄賓館へ着いた。

10月7日(水) 曇 一遼寧省博物館、新樂遺跡一

午前、遼寧省博物館にゆき、今回の調査に係る資料を各々見る。午後は丁度発掘中の新樂遺跡を見学する。調査主任の周さんの説明で、発掘の様子を見る。すでに度々調査報告があるこの遺跡は、瀋陽市の手で遺跡博物館となるらしく、今迄あった建物を取り壊して、その跡地の発掘を行っているところである。新樂下層期の18号・19号住居がほぼ完掘されていた。18号は大型で炉跡が真ん中にあり、支柱は4本、周辺に5～6本の側柱がある。19号は小型で柱は4本だけ、ただ炉跡が中央から壁際へ3箇所設けてある。

この地点の新樂上層期は墓地で、住居区はもっと東にあるはず、とのことである。発掘区の東端に、遼代の墓2基があった。上部が破壊されてはいるものの、底部の残りは良い。遼の円形の墓は報告書ではよく見るが、実際の墓の状況を見たのは初めてである。そのあと、新任の武館長の案内で遺物展示館を一巡した。

10月8日(木) 薄晴 一阜新査海遺跡一

8時08分瀋陽の宿舎発、阜新市へ向かい11時50分着。阜新的宿舎は昨年の南梁城子山測量調査の際の宿舎である。今回はこの秋、新設された査海遺跡博物館参観が主目的のせい、私には次の間付きの立派な部屋が与えられた。

昼食は阜新で毎回お世話になる、馬副市長の招宴。13時45分宿舍発、査海遺跡へ。国道101号の遺跡入り口には“中華第一村”の標識が建てられている。そこから遺跡までの道も、舗装道路となっているのに驚かされる。14時15分遺跡博物館着。中学生らしい団体と一緒に、さっそく博物館を見学。モダンでなかなか立派な博物館である。査海遺跡出土の土器・玉器・石器それに龍文土器片が陳列されている。これらについては昨年の報告で触れたので省略する。

遺跡は博物館の背後にある。昨年までに13基の住居址が発掘されていたが、遺跡博物館の建設を機に発掘区が拡張され、14～23号住居址が、発掘されたままの状態、土器や石器もそのままに公開されていた。昨年の見学のときは埋め戻されていたので、もうひとつははっきりしなかった遺構の様子がよく分かる。特に、住居址の中に設けられ、玉器が副葬されることがある、墓と住居址との関係がよく分かった。16時遺跡発、16時30分宿舍へ。夜、再び馬副市長との宴会。

10月9日(金) 快晴 一平頂山遺跡一

運転手の齊君が風邪で薬を貰いにいったため、出発は8時40分。国道101号を西へ50km走り、紫都台東橋を越えたところで右折し、紫于線を北へ10km、さらに右へ折れ平頂山遺跡へ向かう。集落を過ぎ、低い丘を越えると、右手にてっぺんが横に長く平らな平頂山が見える。先程越えた丘が分水嶺で、平頂山との間に、小川を挟んで平行に南北に伸びる丘の上に遺跡がある。遼寧省文物考古研究所と吉林大学考古学系が1988～89年に共同調査を行い、略報告が『考古』(1992-5)に発表されている夏家店下層文化の城址遺跡である。遺跡は細長い丘の北半分にあり、東西150m、南北430mの長方形である。遺跡北端部と南部の一部には、城壁の跡が明瞭に残っている。

我々が昨年考古測量調査を行った南梁城子山遺跡は、ここから西方約15kmと近い。南梁城子山では、城跡は絶壁に囲まれた険しい尾根の中腹にあったが、ここでは低い丘の上で平地に近い。同じ文化期の遺跡でも立地は様々に異なる。

12時、上天気の下、今日は遺跡の上での昼食。日本から持ってきたカップラーメンを食べる。久しぶりの日本の味か。一番喜んだのは荷物の嵩がへった装備担当の廣川さん。13時遺跡発。14時20分、北票の宿舍、北票旅社着。風邪気味のため休養を取る。元気な皆さんは街を散歩。夜は北票県文化局の方々と宴会。

10月10日(土) 晴後曇 一馮素弗墓、朝陽市内遺跡・北塔・博物館一

8時03分宿舍発、北金線を西北へ約23km走り、西官営子河沿いに下焼鍋で停車。右手の支流の小饅頭溝を、徒歩で遡ること約8～900mで遺跡につく。朝陽市級文化財で「馮素弗家族墓地」の標識が建つ。西の將軍山からなだらかに下がる、川沿いの丘の川岸近くにあり、雨水の通路となって表土が流され、天井石が露出して発見されたい。2号墓はさらに川岸寄りにある。

今は一段と低くなった所に、天井石の一部が露出しているのが、僅かに遺跡を偲ばせるのみで、丘の上遥かに、最近植えられた細い並木が望まれるほかは荒涼としており、北燕貴族墓地とは信じ難い光景である。この遺跡の調査報告は『文物』(1973-3)に掲載されているが、執筆者の黎瑶渤氏とは前遼寧省博物館長の徐秉琨氏のペンネームだそうである。10時前再び車に乗り、10時30分宿舎へ着く。昼食前の時間を利用して、孫先生と一緒に北票県文化局へゆき、この地域出土の遺物を見る。夏家店下層文化の鬲や青銅短剣5口などのほか、青銅鍍金の鞍金具と馬具飾り、それに鏃斗など三燕時代の遺物の幾つかがあった。

13時北票発、14時20分朝陽着。北燕の首都の龍城である。北票からは46kmの距離である。我々の到着直後に着いたマイクロバスから、江上波夫先生が降りてこられた。ご挨拶をして伺うと、今朝内蒙古の赤峰を出発され、途中道路工事のため迂回させられ、遅れたとのこと。そのせいか、少しお疲れのご様子であった。先生の一行は錦州を経て瀋陽へ出、北朝鮮へ壁画古墳を見に行かれるとのこと。ご壮健を願いつつお別れした。

昼食の後、14時55分、まず朝陽市内の発掘現場に行く。一昨年朝陽北塔を見学したとき、北塔と南塔との間を整備し、文化ゾーンにすると聞いたが、それが実施中である。発掘区は北塔の南約500mにあり、10×37mほどのトレンチが、深さ6mほど掘り下げられ、そこに三重の石垣を積んだ建物跡や、工房らしい住居址が現れていた。年代は遼金時代らしいとのこと。それから現代までの堆積の深いことに驚かされる。<sup>〔補記-2〕</sup>

ついで修復がほぼ完了した朝陽北塔に行く。北塔は天宮から遼代の珍宝が多数発見され、その一部は第一回文物精華展に出陳されたので、ご記憶の方もあろう。その故で国家級文化財(第三批全国重点文物保护单位)に指定され、修理中であった。一昨年は全体に足場が組まれていたが、今回はすっかり取り払われ、方形十三重密檐磚築の姿をあらわしていた。塔北側の調査事務所の前には、二種の礎石がおかれていた。一つは方形で上部の傾斜面に龍虎朱雀紋の浮彫りがある。もう一つは上部が円形となり双龍が彫られている。基底部の発掘調査(『遼海文物学刊』1990-2・1991-2)によると、元來、三燕時代の宮殿の礎石であったものを転用して、木造の塔を建てたらしい。

報告者はこの最初の木造建築を、『魏書』皇后列伝にある北魏の文明太皇太后馮氏が、龍城に立てた“思燕仏囡”ではないかとしている。これまで遼西における三燕や北朝初期の遺跡については、あまり有力な資料が無かったが、この朝陽北塔の資料はその欠を埋める一つである。

ついで、朝陽市博物館を参観した。特に朝陽市内の文物精品展の展示品は、実に見ごたえがあった。紅山文化資料から始まり、小波汰溝・北洞・山湾子・海島営子村の青銅器、近年調査された榆樹林子郷炮手営子881号墓・樂家営子901号墓の青銅短剣期の遺物(『遼海文物学刊』1991-2)など、これまで報告されたものがある。しかしまた北票県喇

嘛洞の青銅鍍金矢入れ金具、朝陽県西営子郷甜草溝出土の金製金具類、十二台営子郷の青銅鍍金透彫鞍金具など、未報告の優品がある。北塔天宮発見のガラス瓶なども、ここに展示されていた。未報告の資料の早い公表を期待したい。夜、鳳凰飯店で張文化局長の招宴。

10月11日(日) 快晴 一牛河梁遺跡一

8時40分宿舎発、黄色に色着いた並木の間を牛河梁へ向かう。11時、牛河梁工作站着。郭・孫両先生から牛河梁遺跡の最近の調査の状況を伺う。その後、工作站にある展示室を一巡。昼食の後、いよいよ遺跡へ。先ず、第二地点を見る。一番西のZ1積石塚は、概報(『文物』1986-8)では、中央部が鉄道建設用の溝で破壊されている、とあったが、その中央部東西に2基、深さ約2mほど5～6段の階段を片側に造り、そこに箱式石棺墓が営まれていた。ここからも玉器が出土した。階段は共に南側に設けられ、被葬者は頭を向けあっていた。つまりZ1積石塚はこの2基の墓を中心として、東西に長い長方形積石塚を築き、その積石南辺に、次々と石棺墓を築いたこととなる。

Z4積石塚は一昨年訪れたときすでに掘り出されていたが、北部が二重の円形、南部が長方形の積石を繋いだ形で、中央部に人骨が出土し、石棺墓が造られた、複雑な構造である。

このZ4の東に、Z5が新たに発掘されていた。この積石塚は南北に長く、南部は東西にさらに小さい長方形の積石塚が並び、西方のものには2基の墓が南北にある。北部は中央の円形の積石塚を挟んで、東西にそれぞれ、小型で南北に細長い積石塚が配されていた。さらにその北に、東西に一列に彩陶大型筒形器が並んでいた。以上のごとく、これらZ4・5積石塚の構造は実に複雑である。おそらく一度に築かれたのではなく、時期差があるはずである。詳しい報告を待ちたい。

次いで山上の第一地点、すなわち女神廟に向かう。その後、新しい発掘がされたようであるが、今はすっかり埋め戻され、覆い屋根が掛けられていた。この遺構に対し、嚴文明先生が、神像の倉庫であって、神像は祭の時に運び出され、一段高い広場で祭が行われたという意見を出しておられるとのことである。孫先生らは、神像が建物の壁面に造り付けられていることを証拠として、矢張り神廟であるとされる。なるほど、先程工作站で見せていただいた神像の復原模型が独立像ではなく、背面が壁付きの様子になっていたのはそのせいだ。それに概報に写真がある女性の肘は、その芯が明らかに動物の骨であって、鑑定しないと断言できないが、人間の骨かもしれないとも聞いた。

それから頂上の広場を一巡する。100m四方の方形で、西斜面には3段に石垣が築かれている。先の女神廟から広場を北に越えた地点に、紅焼土が堆積しており、ここから等身3倍大の塑像片が出土し、第二女神廟の可能性があり、とのことである。

さらに、ここから車で4km西へ進み、ピラミッド形遺跡と仮称されている遺跡を見

る。基底部の直経80mで、内側にさらに60mの円形に積み石が回る。孫先生によると20年ほど前までは、周囲に2mほどの石垣が巡り、門もあったとのこと。封土は高さ8mほどで、内部は塊石混じりの版築によって積み上げてある。中央上部に鑄銅に用いたルツボがあり、版築内部には奠基坑がある。この遺構もどのような性格のものであろうか。

5km四方に広がる牛河梁遺跡は、まだまだ興味深い謎に一杯包まれている。今、現地の考古工作場の所に遺跡博物館が建設中で、早ければ1993年の春には開かれる予定とのことである。そうなれば、見学ももっと便利になろう。それにしても広大なこの遺跡の保存には莫大な資金が必要であらう。多くの人の関心がよせられることを期待したい。

夕食は workstation のお嬢さん方の手料理を頂いたが、これがまたおいしかった。夜、我々だけ凌源賓館に泊まる。

10月12日(月) 晴 —義県万仏堂, 奉国寺—

朝食は再び workstation。ガソリン給油で手間取り、9時40分出発。国道101号を朝陽へ。来る時はまだ始まっていなかった道路改良工事のため、迂回する。こうしたときは、先ず丁寧な案内があったためしが無い。運転手の勤だけが頼りである。河の中を走るなどしてようやく国道へ出る。予定を変え、朝陽で昼食。13時30分朝陽から大凌河沿いに下る。巴図営、団花営子を経て、再び大凌河を渡るとやがて万仏堂である。3時22分、石窟の真上に着く。この石窟は早く関野貞・村田治郎氏の調査があり、新中国では閻文儒氏(『文参』2-9, 1951年)、曹迅氏(『文物』1960-6)の研究、それに近年の大嶋京子氏の実査(『仏教芸術』159号, 1985年)が役立とう。

石窟は文峰塔を挟んで東・西区に分かれている。先ず西区に下りる。僧坊の西に並んで前面に伽藍が設けられているのが第一窟で、中心に塔柱を持ち、石窟中最も大きい。内部の仏像は皆清代の修復で、天井の飛天に僅かに創建の面影を残す。いま通路となっている第四窟南面の千仏も当時のものらしいが、後世の補彩が邪魔になる。

第五窟では天井中央の豪華な天蓋が見事である。天蓋は三重で、内側は小さい蓮肉とその周囲を連弁が取り巻く。二重目には六体の飛天が巡り、三重目の複弁蓮華は鋭い彫りである。その右方にも小型の三重蓮華と、その周りを囲む飛天浮彫が二体残っている。飛天の姿は第一窟の飛天に近い。中央の蓮肉部は、蓮の実ではなく、人物か飛天のようである。その下方にも、やはり三重の蓮華があり、蓮の実に代わって合掌人物が三体彫られている。有名な太和廿三年(499)元景碑は、この窟の前に河を背にしてある。

西区の最後の第六窟には、後世の補修を取り去り、北魏時代の姿に戻った弥勒交脚倚坐像が座す。本尊は高さ約3.3m。大嶋氏が記すように、後世の上塗りを落とし、創建時の雲岡様式の姿に戻っている。拳身光背は後補の彩色が多いが、周辺部は彩色が落ち、もとの様相を示す。

ついで、東区を見る。こちらは後世の仏像のほかほとんど何もなく、一番奥の第五窟

南壁上部に彫られた景明三年(502)韓貞等造窟記が名高いが、真っ暗で詳しいことはわからない。さらにその西に釈迦坐像のある第六窟、鉄の釣鐘がおかれた第七窟があるがいまは簡単には行けない。

この万仏堂は北朝石窟のうち、もっとも北に位置する石窟として知られる。開鑿年代や発願者についても諸説がある。所で、先述のごとく、朝陽すなわち北燕の故都龍城の地にある北塔が、北燕王馮弘の孫娘の文明太皇太后馮氏の建立した“思燕仏図”に当るとの説が提出されている。文明太后馮氏が死去したのは孝文帝の太和十四年(490)。この義県は北燕の故地である。この弥勒倚坐像の造像と文明太后の死とを、今一度関連付けて考えてみる必要があるのではなかろうか。

16時20分万仏堂発、16時50分義県の奉国寺着。この寺は遼代、1020年に建立された。大伽藍をそなえた大寺である。そのうち大雄殿のみが遼代創建当時の建物で、遼寧省では最も古い木造建築として、国の文化財に指定され修理が施された。斗と肘木の組合せが見事な雄大な建物である。寺内にあった一般の建物を移転させ、旧境内全体の整備が進行中である。夕食はこの大仏寺経営の食堂で羊のしゃぶしゃぶ。天井まで届く大きな火鍋に驚いた。18時30分出発、19時25分錦州の北山賓館着。

10月13日(火) 快晴 — 錦州博物館 —

8時03分宿舎発。市内南西部の大広濟寺へ向かう。遼代の磚塔が聳えているが破損が著しく、目下足場を掛けて修理中である。錦州博物館はこの寺を転用しているが、修理中のせいで休館している。8時22分着。我々は事前にここで、義県発見の青銅器(『文物』1982-2)と興城楊河の青銅武器(『考古』1978-6)の調査を申し込んでおいた。早速義県の青銅器を出していただく。遼寧省博物館にならべてあるのは皆模造品で、今初めて実物を観察できる。

遼寧省から出土する青銅器は、早く凌源の海島営子村からの一括出土品に始まり、山湾子、北洞、小波太溝、和尚溝と、いずれも朝陽市南部の2-30km四方の範囲から出土し、和尚溝以外は墓ではなく窖藏である。この義県のものもやはり窖藏であるが、出土地点が義県の北部、医巫閭山の南麓で、ぽつんと飛び離れ、最も東方であるのは重要である。

出土したのは簋-1、鼎-1、甗-2、俎-1の5器である。なかでは簋が製作、紋様共に最も優れ、中原の製作になるものであろう。鼎は紋様が3単位で一周せず、足りないところを一部分、別の紋様で補ってある。甗の1器は中のすのこが付くようになっていない。紋様の施紋がお粗末で、銅質も悪く、“す”が多い。これらはいずれも遼寧省のどこかで製作されたものと見られる。

義県出土の青銅器のうちで、最も期待していたのは俎である。青銅製の俎はそれ自体極めて珍しいが、さらにこの俎には2個の鈴が吊り下げられているのである。中国でも



勿論国宝に指定されており、館員の方が慎重に収納箱から出して下さる。その筈で、鈴を吊り下げた環が、脆くなって危険なのである。よく見ると、鈴はそれぞれ紋様が異なり、形も若干異なる。舌はない。吊り下げるには、俎本体と鈴にあるそれぞれの環を、上下で90度向きを変えた双環で繋ぐようになっているが、この双環の造りがお粗末で、しかも長すぎる。明らかに元の環が壊れて作り直してある。その技術が拙劣なところを見ると、修理はやはり、この地の青銅器工房で行われたことが明らかである。

次に楊河の青銅武器類を見せていただく。私は昨年(1992年)の日本中国考古学会総会において「遼寧東部の青銅器文化」の発表を行ったが、この楊河の資料は、遼寧西部と東部を結ぶ重要資料でありながら、写真しかなく、比較検討が充分行えず、残念な思いをした。素環頭刀子3口、戚1口、戈1口、鈎具1口からなるこれら青銅武器類は、青銅容器類とは異なるありかたを示し、はるか遼寧省東部からさらに鴨緑江まで、同類品が運ばれ、その地の青銅器文化の幕開けとなるのである。写真と実測図を作成して研究資料とし、渴きを癒すことが出来た。

館からほど近い南北食堂で館の皆さんと昼食。14時08分別れを告げ綏中へ向かう。途中、清朝時代の城壁に囲まれた古い町並みが保存されている、興城の街を30分ほど見学。城壁を壊して町を近代化するところが多い一方、興城のように解放前の商店街を保存し、また復原し、店の飾りや看板などまで、かつての趣を再現した町並み保存が、中国でも行われていることを知ることが出来た。

さらに国道102号線を南西へ、綏中を過ぎた万家屯から国道を左折して海岸へ向かい、錦州から193km、真っ暗くなった18時40分、姜女石工作站に到着した。

この工作站は姜女石の真ん前で発見された秦・漢宮殿遺跡発掘のため設けられたが、その後増設されて、現在では遼寧省各地の発掘資料の整理基地となっているらしい。昨年、大連市廟山(『遼海文物学刊』1992-1)の遺跡を見学した際に、世話になった吉林大の陳国慶さんも、大連市大嘴子の遺物整理に来合わせていて、早速別棟で土器を見ながら説明をして下さった。

それによると、大嘴子からは双砮子1期の墓が3基、同2期が1基、同3期が8基発掘され、双砮子3期は切り合いによりさらに3段階に分けられる、ということで、すでに報告書用の図面も完成していた。まもなく発表されると思われるが、ここからは炭化米も出土している。日本への稲の伝来ルートの問題に、重要な一石が投じられよう。

夕食は工作站の御馳走を頂く。目の前の海からあがる蟹に舌鼓をうつ。20時18分工作站発、11km南西へ走ると河北省の山海関である。20時45分着、京山賓館に泊まる。

10月14日(水) 晴 一山海関、綏中姜女石秦・漢宮殿遺跡一

朝起きると宿舎は山海関の目の前である。宿の玄関を出ると、目の前に「天下第一関」の額が目に入る。迎えが来るまでに城門に上がる。西の方、はるかな山の上へ長城が延々

と連なる。

もっとも、この長城は明代以降のもので、戦国・秦・漢の長城は最近の論考（李慶発・張克挙『遼海文物学刊』1991-2）に内蒙古の赤峰市から東へ、敖漢旗の新惠鎮、遼寧省の阜新市へと伸び、15～20km程の距離において、南北二重に連なり、さらに東は鴨緑江までとどく。年代は南の長城が燕の時、北の長城が秦・漢時代とされる。

我々も1991年に日本学術振興会の補助金（国際共同研究）により内蒙古東南部を踏査したとき、赤峰市東北で秦の長城と衛城に至った。従って、今の長城の外となっている綏中の秦・漢宮殿の位置は、当時は長城からはるか内側なのであった。

10時05分宿舎から車に乗り、長城が渤海にとどく老龍頭に行く。簡単に参観できると思っていたが、そこは天下の山海関で、見学に2時間はかかるといわれる。駆け足で一回りし、45分で駐車場へ戻り11時15分発、11時40分工作站へ着く。応接室で三先生からこもごもこの遺跡の説明を受けた。この遺跡はすでに『文物』（1986-8）に概報が発表されているので、おおよそのことは承知していたが、秦・漢宮殿はこの綏中だけでなく、河北省の山海関、それに高級避暑地として著名な北戴河海浜の三箇所に設けられているとのことで、その規模の雄大さに驚嘆させられた。いずれの遺跡からも秦の夔文大瓦当が出土しているが、北戴河の宮殿址は綏中の遺跡と同様の大規模なものらしい。後に河北省の参観の際に頂いた『文物春秋』（1992-特刊）に、北戴河の調査概報が掲載されていた。

工作站には展示室が設けられており、遺跡の概要が示され、また、出土した瓦当、瓦類、磚それに土器などがならべられていた。昼食までにそれらを調査した。

昼食後、いよいよ遺跡の見学に向かう。工作站があるのは遺跡の中心の石碑地で、ここを中心に、左右に翼を広げたように約1～2kmの距離において、突き出した岬の上にも宮殿址がある。西が黒山頭、東が止錨湾の遺跡である。黒山頭遺跡は前漢代、武帝以前と報告がある。現地は遠望しただけであるが、工作站に先の概報掲載の実測図をもとにした、黒山頭の大きな遺跡模型が造られていた。咸陽1号宮殿のごとく、版築土台による重層建築である。

現在、発掘作業は中央の石碑地遺構に集中しており、既に発表された遺構図以上の発掘成果があげられている。遺跡西南部には2箇所、城壁から外へ導かれた排水溝が発掘されており、東辺の外郭は地形に沿って複雑に屈曲するらしい。発掘中の一部分には多量の瓦片が散布し、半瓦当が一個姿を現わしていた。

石碑地の遺跡正面の海中に、孟姜女の伝説で名高い姜女石が立っている。左は完全で、高さ24mあるが右は倒壊している。というのも、この姜女石は自然の岩ではなく、人工的に海中に巨石を積み上げて造ったらしく、今は海中に没しているが、波打ち際から姜女石まで石積みの道が続いているそうである。『史記』秦始皇本紀の“碣石門”にあたる

のか。一体、築造当初はどのような姿であったろうか。

夕日を受け、真っ青な海に浮かぶ姜女石は、女性の立像のようにも見える。孟姜女の伝説と結び付いた所以であろう。山海関のすぐ北の国道沿いには姜女廟もある。しかし先述のごとく、秦代の長城ははるか北である。明代以降、長城がここまで退いてから伝説と結び付けられた、と考える方が無難であろう。

渤海の海は青々と美しい。この綏中から北の塔山鎮大南舗村東南5kmの海中で元代の沈没船が発見され（『遼海文物学刊』1992-1）、中国の水中考古学の実践場として、中国歴史博物館の俞偉超先生、日本の田辺昭三氏らが参加された。今年（1993年）春日本で開催された中国水中考古学の成果展覧会に、この綏中発見の元代陶磁器も出陳されていた。

夕食は再び工作店の食堂である。今回の中国での共同研究もいよいよ今夜で終る。大連から同行の楊君ともお別れである。吉林大の陳さんらも入り、賑やかな宴となった。宴の後、8時18分発、8時45分再び山海関の京山賓館着、宿泊。

10月15日(木) 薄晴 一北京へ一

山海関から北京へは車で行くこととなる。8時31分山海関を後にする。秦皇島、北戴河と205号線を行く。昌黎付近、右手に碣石山が見える。姜女石の宮殿址が発掘されるまで、ここが始皇本紀にある碣石門の所在地、と考えられていた山である。次いで右へ折れ、再び102号線に入るが道はあまり良くない。12時02分豊潤で昼食。13時08分出発、玉田、三河を経て15時25分北京市へ入る。王府井の考古研究所到着は16時30分。山海関からここまで345km。北京の宿舎は期待が外れ、昨年泊まった新僑賓館の隣の社会科学賓館で、皆どっと疲れが出るも止む無し。

10月16日(金) 薄晴 一国家文物局、考古研究所訪問一

8時30分宿舎発、8時45分国家文物局に張柏副局長をお尋ねし、共同研究への助力の感謝と、併せて成果の報告をする。張局長とお会いするのも二度目で、郭先生らも同席され話がはずむ。文物処の担当者の楊さんは水中考古学のスペシャリストで、綏中での調査にも参加されたとのことであった。9時15分辞去し、空いた時間に文物出版社の売店で本を買う。皆、最新の発掘報告書類を山のように買う。もっとも一番沢山買ったのは研究所用の本を買った辛先生。

10時30分考古研究所へ。応接室は完成したばかりの新館の2階である。徐萃芳所長、徐光冀・烏恩副所長はじめ諸先生がおいで下さる。筑波大に留学していた白雲さんも中国側通訳として出席。ここでも遼寧省の三先生とともに、共同研究へのご助力に感謝し、成果を報告する。さらに今後の共同研究について考古所の意向をお伺いした。11時15分辞去し、張柏先生らとの会食のため北海公園へ向かうが、車が込合ってなかなか入れずお待たせしてしまう。北海公園の中の仿膳飯荘は風情のある老舗である。会食後14時30

分瑠璃廠で本を探す。15時45分宿舎へ帰り、本の発送。18時、今度は四川豆花飯荘で考古所の諸先生と夕食懇談。これで北京での諸行事は無事終了しほっとする。

10月17日(土) 晴 一歴史博物館、故宮博物院参観一

今日は午前中のみやっと自由行動。私と岡村氏は連れ立って8時20分宿舎発、歩いて歴史博物館へ、8時45分着。孔祥星副館長と懇談中に、わざわざ会議を中座して俞偉超先生がおいで下さる。先生の指導でこれまで8年間発掘を続けてこられた、山西省垣曲の二里头文化期の城址遺跡や、河南省班村の廟底溝文化期の遺跡の発掘の様子を詳しくお話頂く。またご関心の深い水中考古学のことなど、かなりのお年にかかわらず、先生の学問への情熱に溢れたお話しに時間を忘れそうになる。

10時過ぎまたの再会を期しながらお別れし、展示を見る。途中廣川さんに会う。11時30分北京飯店で皆と落ち合い昼食。13時宿舎へ戻る。13時30分、北京大学考古学系へ留学中の時雨さんも一緒に、故宮へ向かい、まず開催中の第二次文物精華展を見る。今回も実に見ごたえがある。その後16時過ぎまであちこちの展示館を見て出口へ。16時半故宮から民族飯店へゆき、遼寧省の先生方が送別宴を開いて下さる。こうして今回の中国における共同研究の日程をすべて無事終了した。明日からは河北省での考察となるが、それについては別途記述することとしたい。

我々日本側の共同研究の計画は無事終了し、あとは1993年春、中国側の訪日考察を残すのみとなった。考古学分野における日中国際共同研究を、初めて成功させることが出来たことを喜びとしたい。

### 3. 共同研究を終えるにあたって

共同研究の協議以来、幾つかの問題点もあったが、それらを乗り越え、成功に導けたのは、日中互いに真摯な研究者としての相互の尊敬と信頼感が、その基礎になったと思う。日本側を代表して、郭大順先生を代表とする遼寧省文物考古研究所諸先生に、心からの感謝を申し述べたい。それとともに、中国考古学会理事長の蘇秉琦先生始め、尊敬申し上げる多くの先生から、様々なご支援があったことを、誠に有難く御礼申し上げる。国家文物局の張徳勤局長、張柏副局長をはじめ文物処の担当各位、考古研究所徐萃芳所長、徐光冀・烏恩副所長はじめ所員諸先生、北京大学考古系宿白・嚴文明教授ほか諸先生、歴史博物館の俞偉超館長ほか館員諸先生ら、実に多くの先生方に様々にご指導いただいたことも忘れ難い。

実際の共同研究に際しては、あまりに数多いため、一々のお名前を省かせていただくが、遼寧省内各地の文化局・外事弁公室・公安局担当各位、博物館・遺跡現場においての調査・見学の便宜を計って頂いた皆様様に、厚くお礼申し上げます。以上の多くのの方々

の御厚意のお陰で、我々は4箇所の考古測量調査を行ったのを始め、各地の遺跡や博物館において調査研究を行い、研究資料を蓄積することが出来たのである。

今回我々が行ったのは発掘調査ではなく、考古測量調査である。本来は発掘調査に先立ち、遺跡の現状を周辺の地形を含め、正確に測量図面に作成するものである。この作業は本来、国土座標と連動していることが望ましい。しかし我々にそうした座標系は公開されない。将来、そうした座標系に連続できるよう、また、今後の発掘調査の際に基準となるよう、各調査地点にコンクリート製の基準杭を埋設しておいた。

そのような制約のもとに作成した図面であるため、標高はすべて仮定のものである。いつの日にか、訂正する機会の訪れることを願うものである。

最後に、この3年間、労を共にした共同研究者各位に感謝したい。そして共同研究者としての参加を、こころよく許可頂いた各所属機関に感謝申し上げる。

ささやかではあるが、日本人研究者として、新中国の大地に初めて考古学的研究を行うことが公式に許可された背景に、本国際共同研究の経費が、財団からの経費でなく、文部省の科学研究費補助金（国際学術研究）という、公的経費であったことが大きく作用していることを記し、我々の研究費申請の許可にかかわられた各位に、深甚の謝意を表するものである（1993年1月11日、9月30日補訂）。

本稿は平成4年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）による研究成果の一部である。  
〔補記-3〕

- 〔補記-1〕 大嘴子遺跡については『遼海文物学刊』1991-1、『農業考古』1992-3に許明綱、劉俊勇氏の紹介がある。
- 〔補記-2〕 『人民日報』海外版1993年6月に“朝陽発見三燕故都遺物遺址”の記事が掲載された。その記事によるとその位置は私たちが見学した地点で、更にその下層から三燕時代の遺跡と遺物が発見された模様である。
- 〔補記-3〕 本報告を含む3年間の国際共同研究の成果は秋山進午編『東北アジアにおける文明の源流の考古学的研究』大手前女子大学文学部 1993年3月刊にまとめた。中国側との正式報告書の刊行は目下計画中である。